

澁江抽齋墓碣銘 原字による読み下し文

この墓碑には何字か欠損があり、このうち以下の二字は全く判読不能である。

〇行目「與世醫■□(二十空) □(二十手、庭)乎」

〇行目「長恒善尾鳥氏出先■空」

ほかの●を傍らに付した字は、一部欠損のある字である。

《篆額》 抽齋澁江

君墓碣銘

1

澁江道純墓碣銘

2

上總海保元□(二十有、備)製文 備(備)後小島知昱 1

(足、小嶋尚□(二十同から一を去る、春澳)書し、并せて篆額す

3

嗚呼、其の名を問へば則ち醫也、其の攷古、博渉の力を問へば

則ち吾が□(二十需、儒、學問)猶ほ□(二十鬼、愧)あるがごとし。こ

れに宜きは、尋常醫流の之を目するを以てすべきか、吾が兀なるを

以てすべきか。親しく交れるは□(二十佳、維)れ、

4

弘前の澁江道純、其れ之に似たり。道純、少くして學を市野迷

庵に受け、長ずるに迨び復た狩谷椽斎に從ひて遊ぶ。盖(蓋)し近今

の古學を論ずる者は、一老(老、二老は老子・莊子か)を必推(無理に推賞する、

こじつける)すれど、

5 道純、晨夕にその中を浸灌し、その學具わるが故に端緒を有す。

遂に推して以て醫方を切劘したり。宜しきかな、その立論の大いな

る。世醫と與に□(七十空) □(六十手、庭、徑庭、まっすぐに進む、激

しく進む)を■(欠損して未詳だが「行」とも読める)かむか、

6 世醫、醫事は自らに心得有りと言ひて書に關わるを非る。乃ち

或(或)は讀書して之を求むること、輒近(このころ)にして是るも、古

人の既に注せる迹の高(奇)なるに追るを用いざりし。道純乃ち謂う、

鑿

7 の妙は必ず自ら讀書中に處(處)し得(強ひ肯定の気持ちを表す助詞)来

(希望・命令を表す文末助詞) □(七十、七十亦)た必ず自ら古書中にあり得

来。素問の陰陽結斜の斜字の如き、前人、其の解に難ずるも、道純は

謂ふ、斜は當に斜

8 字の訛りなるべし。説文「糾瓜瓠結り」を引き證として云ふ、

「結糾」は即ち「結り」、其れ七損八益に玉房秘訣を引きて謂ふ、其

の言と王注と付洵して古

9 来相傳の説を為す。靈樞の「精ならざれば則ち人に正當ならず」

の言も□(七十、七十)た人に異なれり。道純、「正當」は連文なり

と謂ひて、華佗の為せる證を援く。識者、其の明確なるに服(服)すべ

し。其の

10 醫方の傳は、之を伊澤蘭軒に□(イ十尋、得)、復た治痘の訣は

池田京水□(オ十人十、ニ於)り受く。□(燃の犬を火に置換、然)るに

亦た、未だ敢へて人のために治を施すを輕んぜず。毎つねに古善本を徵

せよ、古醫経を校せよと謂ひ、

11 以て古醫道を味わうを吾事として畢せり。何ぞ必して(自説を柱

げない)屑屑し、世醫と争ふこと長き乎。故友丹波君菫□(ア十人十手、

庭)、□(嘗十一十日、嘗)て迷庵掖□(齋の示を米に置換、齋)の歿すること

廿(三十年)にして、

12 能く古本を鑒別せる者は唯だ道純及び森立之にして罕ほとんどなしと

欺く。獨り能くその真傳かたちの相を□(イ十尋、得)、輿に謀りて其の経

籍訪古志を撰ばせ使む。余、亦た嘗て之に序を為せる間に寓目せる

は、

13 例へば學者の傳録稱を少と為すべからざるの種なり。意へば道

純の力居、多なりき。家に多く古本を儲け、一つとして精□(羊十石、

善)ならざる莫く、藏せる所の各書、一つとして

14 點校を經へざるは莫し。學者にして考古を欲する者、必ず借觀(借

鑑・他人の言動を自己の戒めとする)して□(正)しきを□(耳十く、取)るべし。

性は沉黙□(ハ十百十小、寡言にして、□(ハ十木十豕、遂)に見えざ

るが如きを視るべし。長じて追^おへる所、其の人と爲り、辨證(分析して証明する)する所有りて各々其の

15 益を獲るべし。其の精に博を服(服)し始めたは弘化甲辰と云う。

16 官命ありて暨^じを躋^じ壽^じ館^にに□(言十六十母、講)じ、歳に(歳ごとに)賞賜有り。嘉永巳酉に奉じ始む。

17 朝見既に又た例なりて廩米を賜る。凡そ館中(分)校(手分けて校正すること)の各書、必ず道純を経て再勘し、(燃の犬を火に置換、然る後、空(定)めと爲す。著す所は素問識小、□(言十…十巫、靈)樞講義、及び雜録

18 若干卷有り、皆家に藏す。道純、諱は全□(羊十石、善)、抽齋と號す、道純は其の字也。『祖日本皓考』に曰く久(九)成の世、弘前の侍醫と爲る。妣(死んだ母親)は岩田氏。其の

19 生れて在るは文化乙丑十一月八日、以て安政戊午八月廿九日病□(弓十巳十又、没)す。年五十有四を得、江戸谷中感應寺に葬らる。

20 三子有りて、長は恒□(羊十石、善)、尾島氏出(尾島氏出身の抽齋の妻)先■、次は優□(羊十石、善)、岡西氏出(ト、なにがし、後に矢島氏

と爲る、三は成□(羊十石、善)、山内氏出(五頁、繼いで一女平野氏出。

21 子皆な余(余)に託され學を受く。□(士^三之十^三戊、越、助詞ニに)

に己未、將に石墓を勒^ほらんとし、道^のぶるに余(余)□(キ^二十^二ハ、於)

文を

属^{じゆ}す。□(口^一十^一カ十^一鳥、鳴)呼、吾が親交する所、小鳥寶素君、丹波

藍□(ア^一十^一ハ十^一手、庭)曉湖の二君、

22 及んで掘川舟庵の如き、□(婁^一十^一門^一十^一女、數)年の間に、皆な相

繼いで道山(仙人の住む山)に□(呂^一十^一帝、歸)る。今□(リ^一十^一復、復)た道純

の奄□(歹^一十^一口^一十^一又、歿)に遇ひ、筆を執り以て墓石に志さんとす。鉞

く既□(大^一十^一鳥、焉、慨焉・なげく)三欺せざらん乎、遂に

23 其の生平(平生、一生)を節(節)録(要点のみの記録)し、併せて銘と為す。

銘じて曰く、

24 醫家を以て醫書を治め □(ナ^一十^一需、儒)者に與りて經を治めて一

致す □(ム^一十^一佳、維?)ぞ是れ古は微すに足(足)る 何ぞ問はむ今

人に、異(異)有るやを 嗟^あ矣乎

25 斯の人しかりして亡く 此の理、其れ誰と與に議らむ

26 萬延紀元(1860)、歳次(年まわり、あるいは歳星^二木星の次)、上童(童^一章・

火の兄の異名)、涪灘(天歳が申にある年)、八月廿九日建つ 廣臺鶴刻字す